

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<文献紹介> アンドレア・ウルフ 著 鍛原多恵子 訳  
「フンボルトの冒険：自然という 生命の網 の  
発明」

著者	細田 浩
出版者	法政大学地理学会
雑誌名	法政地理
巻	50
ページ	54-56
発行年	2018-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/13957">http://hdl.handle.net/10114/13957</a>

## 【文献紹介】

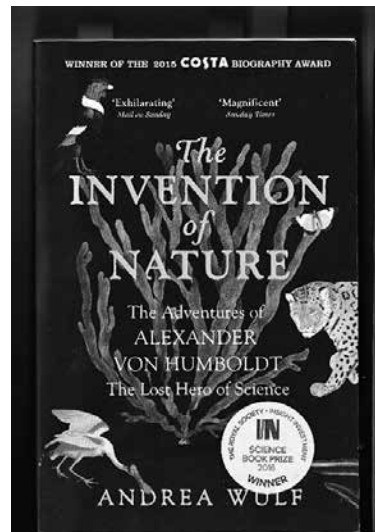
アンドレア・ウルフ 著（2017年1月） 鍛原多恵子 訳  
「フンボルトの冒険——自然という〈生命の網〉の発明——」

NHK 出版, 493p, 2900 円 (+ 税)

“The Invention of Nature — The Adventures of Alexander von Humboldt.  
The Lost Hero of Science —” 2015 Andrea Wulf, London, 455p. £9.99

アンドレア・ウルフの著した“The Invention of nature”. この本の題の邦訳は「フンボルトの冒険」となっている。「フンボルトの—」と付けたのは良かったが、「—冒険」となると、違和感がある。なぜなら冒険家として知られた A.v. フンボルト（以下フンボルトと称す）の南米、その他の地域への冒険旅行についての本だと、一見して印象付けられるからである。実際の主な内容は副題にあるように、フンボルトの思想・生涯から宇宙観までを“web of life”という観点から再評価し、そういう意味において、フンボルトの知の冒険について述べ、その後に続く者たちをフンボルトとの関係において紹介している著書なのである。著者アンドレア・ウルフはインドに生まれたイギリスの科学ジャーナリストで、日本語訳の本には、表紙裏に若い美女が写っているのが驚いてしまう（原書のほうには著者の写真は無い）。著者がインドに生まれ、ドイツに移住、イギリスで活動中・・・である事実は、フンボルトの原典に当たる上で有利な環境にあると言える。これまでは本著のように網羅的にフンボルトの一生を多方面から見て描いた本はなかった。従来まで不思議に思っていたことや、フンボルトについて知らなかった多くの面について、良く文献に当たり、調べ、描かれていることにまず敬意を表したい。その上で、本著の主眼はフンボルトの本質を「自然の理解には科学データと同様に、感性によって経験されなければならない」と述べて、科学的理解と感性による受容との両面からとらえるという点が主眼のひとつであろう。またフンボルトの思想を web of life という観点からとらえ、life だけでなく、有機物も、無機物も地球上の小さなコケから、宇宙までを関連する一体のもの web として捉えなおし、そういう観点から、他の多くのフンボルトの後継者とのつながりを紹介しているという点にも最大の価値があると思われる。

評者は最初、web of life という概念は後の時代の生態学者から与えられた概念であろうと考えていた。アメリカの生態学の教科書、例えば R.G. Bailey の“Ecosystem Geography”などには頻繁に web の概念が使われており、全ての生態系は繋がっている、と述べられている。またレイチェルカーソン以後、アメリカのジャーナリストなどによる環境保護運動は、よくそのつとめを果たしている。ウルフの視点は、そういった後世の環境主義の観点を踏まえて、その始祖がフンボルトだと述べている。その証明としてフンボルト自身



がこの web of life という概念を述べているというのである。評者は半信半疑で文献に当たってみた。フンボルトが web of life をどこかで使っているのかどうかは、この文献ではわからない。Web of life については原書 405P. に注 246 “wonderful web of organic

life” フンボルトの *Cosmos* 1845-52 vol. 1. p. 21 に出ていてと記されている。原文では *wundervollen Gewebe des Organismus* これをウルフが英文に翻訳したものである。

この本の文献の挙げ方にも驚いた。通常、注・文献は巻末にずらずらと著者のアルファベット順に並べるのが、これまでの通例である（原書はそうになっている）。ところが邦訳本は注・文献にナンバーがふってあって、ネットで調べるようになっていのである。そこでネットでアクセスしてみた結果は特別な資料ではなかった。原書と同じ文献が示されているだけであるから、その文献をいままで通り当たるしかない。そのうえネット上の邦訳は注がやや省略されていて、これなら原書の頁をめくるほうがずっと親切だ。

さらにもう一つ本書の特徴はフンボルトの著作だけでなく、彼に連なる系譜を17世紀の哲学者から、20世紀の活動家ジョン・ミューアまで、時系列的に並べている点である。そのことによって、だれがどの順で、誰に影響を与えたか、ということが実に明確になった。これは私自身が不勉強であるという事をさらけ出すのみであるが、「個体発生は系統発生を繰り返す」（この本では引用していない）のヘッケルが「一般形態学」を上梓するのは1866年で、フンボルトの死の7年後である。フンボルトから影響を受けていたと書かれており、ヘッケル自身の著作の中に、そのことを証拠立てる一文があるというのである。これも当たって見たところ、フンボルト自身の言葉としては *Active force* のシステムであるとは言っている。またヘッケルが書いている *web of life* はフンボルトからの引用である、とウルフが言うのは微妙な解釈である。その言葉についてのフンボルトの引用は無い、また本文には地球は一個の巨大な生命であり、すべては互いにつながっていると述べているが、フンボルト自身の言葉としては *net like intricate fabric and living whole* との表現が *“kosmos”* の中で述べられている。

C. ダーウィンの記述部分にしても、同様の印象をもった。ダーウィンがライエルの「地質学原理」をヴィーグル号の中で読んだということはよく知られており、評者もライエルがダーウィンの先達だったのだらうと思っていたが、本書内では源はフンボルトであると指摘されている。「ヴィーグル号航海記」を読んだときに評者は気づかなかった。これらは従来の定説をかきつがえしているのではないだろうか。一方、ダーウィンについてはA. R. ウォーレスの進化論が先行していたのではないかと良く言われているが（例「ダーウィンに消された男」など）、これについてはまったく触れられていない。これはフンボルトを中心に筋道だてられているので、ウォーレスの存在はcontext上、傍流となり、いわば邪魔者であるということになるのだろうか。フンボルトの生涯に関しては実に事細かに調べられ、書かれている。フンボルトとゲーテの交流についてはよく知られている。評者は、実際のところゲーテとの交流はフンボルトの若いときのもので、その後の交流は形式的なものだったのでは

ないかと疑っていた。「あなたを心から敬慕します」などと言ったり、手紙で書いたりすることは、この時代では当然で、それは多くの場合儀礼的な言辞である。とりわけ権力者に対しては恥ずかしくなるほど慇懃で、丁寧なものの言いをしてきたのである。文献に残ったものを読む場合、これは心からの気持ちを表したことなのか、誰でもが書く大仰な儀礼的挨拶文なのだろうか、どちらをとるかは解釈によるだろう。とまれ、著者ウルフはゲーテとフンボルトは生涯にわたって、互いを尊敬し、意識しながらそれぞれの著作、思考を深めていったという観点に立って立証し、成功している。フンボルトの交友関係などについてもこれほど綿密に調べられているのは驚異的で、注・文献によれば、多くの書簡を研究し、引用した成果である。従来のフンボルト像を一気に変えた、衝撃の一冊であることは確かであろう。

フンボルトの私生活についても興味本位ではなく、好意的に事実に即しているように思われる。その生い立ち（とりわけ厳しかった母親）のせいであろうか、フンボルトが今でいえば、やや多動性発達障害的な傾向を示し、生涯独身で、異性には興味を示さなかったようであるが、親しくなった男性もかなり多数に挙げられているのも納得できる環境である。有名な化学者のラボアジェとはそんなに親しかったのか、と驚くばかりである。またシモン・ポリバルも単に南米出身の野心的青年という存在ではなかったと描かれている。一方、あれほど共に行動したエメ・ボンプランとは、そのような存在ではなかったことが描かれているが、納得のゆく捉え方であると思う。よくこれまでは書かれてきた（例えばビュール・ガスカルによる）執事ヨーハン・ザイフェルトのことはあまり触れられていない。このことは信すべき資料がなかったか、ウルフにとっては重要だと思われなかった（あるいは書きたくない）ためであろうか。

ともあれフンボルトという人物の実像をあれこれと想像してみる際にも多くの示唆に富んでいる。現代ならば発達障害者とされかねないような天才フンボルトの人となり、は従来の書籍からも想像はできるのだが、絶えずしゃべり、相手にしゃべるすきを与えないで、セカセカと動き回り、思いついたらすぐにそれを手にとり、365日24時間活発に活動し、よく記憶していた脳は、ある種最適な時と場を得て、120%その能力を発揮し得たという90年の生涯のことがよく伝わってくるのである。従来、特に強調されなかった2点、南米における独立運動、（よく知られている）反奴隷制についても解説は詳細をきわめている。特にシモン・ポリバルの南米革命に対するフンボルトの影響については「植民地主義と奴隷制に対する批判や、素晴らしい景観の描写が中南米の解放に火をつけた」とウルフは解釈している。ポリバルは1804年フンボルトとパリで会って、影響を受け、3年後にベネズエラに戻り、スペイン王党派との戦いに身を投じる。後に大統領となるポリバルは残忍な布告を実施して、フンボルトの予測どおり革命は厳しい内戦に突入する。

その際にもフンボルトが改めて認識させたチンボラソ山の素晴らしさ、南米自然への誇りが彼の革命のシンボルとなってゆく。胸のすくようなウルフの叙述である。

また、フンボルトとアメリカ大統領ジェファソンとの交流、それは自由の国アメリカ合衆国にフンボルトが肩入れすることになり、スペインから多くの領土を割譲させるのに役立った。フンボルトは中南米の宗主国スペインにとっては憎っくき裏切者であろう。イギリスの東インド会社がフンボルトやその支持者たちの再三の働きかけにも関わらず、フンボルトのインドへの旅行を許可しなかったのは、イギリスの国益的な意味からは賢明な政治的判断だったかもしれない。この時代、政治的にはフランスを中心に、フランス革命、ナポレオンの独裁者への変質と周辺国との対立など、ヨーロッパ社会は激動をきわめた。激動する国際社会の動静にフンボルトの去就は深くかかわっている。フンボルトは18～19世紀の新旧大陸の政治的動乱の脇にいて、かつ中心にいます。プロイセン王の侍従にして、旧体制を打ち砕く自由主義者。その活動は科学の最先端、発見の最先端、しかも旧体制の貴族にして、新体制への移行を直言する自由主義者…という、歴史上、政治的に実に微妙な立ち位置にあった。

フンボルトへの賞賛、社交界、科学者界だけでなく、社会の全体が熱狂したフンボルトの存在というものについても知ってはいたが、これほどまでか、と読ませる、生き生きとしたウルフの描写力である。フランスで、イギリスで、祖国プロイセンで、アメリカで、中南米で、フンボルトは熱狂的に喝さいを浴びた。時代の寵児であったフンボルト。別の彼の伝記では、晩年は孤独で、社交界の嘲笑を買って云々、というフンボルト像もある。多分どちらも正しく、見方によってはいかようにも解釈はできるものだという気がする。

もう一つは環境保護活動へのコミットメントである。評者は「新大陸赤道紀行」などを読んだ限りにおいて、フンボルトについてひとつの見解をもち得たので、ウルフは少し理想化し過ぎて描いているかもしれないと思う。というのは、例えば先住民の立場にたったの言動、とウルフは書くけれど、フンボルトの旅自体が教会や、スペイン王の権威に裏打ちされての自由、格別な旅をしているのだった。フンボルト自身、

無知な現地人に呆れてもいる。環境保護についても、むしろ開発を進めることで国家の財政に資すると提言、報告している。森林破壊についても、ウルフはフンボルトが環境保護の先人だと述べているが、フンボルト自身の手記によれば、鉱山開発よりは、有用な農業による生産のほうが経済的に資すると報告しているので、熱帯雨林の伐採に反対する後世の環境運動から見れば、果たして手放して賞賛できるのだろうか？必ずしも保護一辺倒ではないフンボルトはJ・ミューアではないのだ。しかし、マーシュ、ソロー、エマソン、J・ミューアらが、フンボルトに影響を受けていたというのは文献からは間違いないので、フンボルトの影響力はそういった分野にも多大であった、と改めて気づかされる。フンボルトに至る思想的な流れ、とりわけ経験論と機械論との相克もウルフは実に明快で、こんなにクリア、かつシンプルに表現して良いのかと、とまどうほどである。

18世紀から19世紀にかけての知識人にとって、ニュートンが、ゲーテが、ライエルが、ダーウィンが、中世の宇宙観、自然観、環境観、人間観から抜け出させしめた。人々の目を開かせた。否、その過程で、ブルーノが、ガリレイが、そして多くの異端審問にかけられた人々が犠牲になった。その犠牲の上に科学の時代が来たのである。フンボルトは全身全霊でそれを探り、表し、語った。最後の絶筆までの人生をかけて、フンボルトはホーリズム、全体主義、宇宙の全体、地球上のすべて、それらのつながりを頭に描いた。それをwebというキーワードで解き明かしたウルフによる紹介は、どこかに偏りがあるにしても、フンボルトはこうあって欲しいと願った私たちの像をみごとに描き切った。それはウルフの願いを結実させたものではないかと、私は思う。

付記：本文の一部は雑誌「地理」62-10号2017「書架」欄に、山下脩二氏と共著で執筆した。同欄は字数が極端に限られているため、別稿として改めて書き直した。また、別な観点から山下脩二氏によるこの本の紹介は“Alexander von Humboldt 研究 No.7”に掲載されている。併せてご参照いただければ幸いである。(細田 浩)